

古代ギリシアにおける 教養・教育の理念に関する研究 (3) — W. イェーガーの『パイデア』に学ぶ —

A Study on the Ideal of Culture in Ancient Greece Learning from Werner Jaeger's *PAIDEIA*

畑 潤

HATA Jun

I. 本研究の課題と構成について

1. 本研究の課題について

本研究は、ドイツの古代学者である W. イェーガー (1886年～1961年) の著書『パイデア』 (*PAIDEIA DIE FORMUNG DES GRIECHISCHEN MENSCHEN*) の G. ハイエットによる英訳版『パイデア』 (*Paideia: The Ideals of Greek Culture*) から学ぶことを主題とし、下記の研究に継続するものである。

- ・「教育学と教養理念の起源に関する研究—W. イェーガーの『パイデア』から学ぶ—」
(都留文科大学大学院紀要第15集、2011年3月、所収)
- ・「古代ギリシアにおける教養理念に関する研究 (2) —W. イェーガーの『パイデア』の「序論」から学ぶ—」 (都留文科大学大学院紀要第19集、2015年3月、所収)

イェーガーは第Ⅰ巻 (1934年) の「序論」において、古代ギリシア人は長い年月をかけて、共同社会を建設する格闘のなかでパイデアー (教養・教育) を意識していき、とくにポリス・アテーナイの政治的危機の時代に、ポリスの深い再生にかかわって、その理性的な探究を極めていったと述べている。⁽¹⁾ それは人間性 (human nature 人間の自然性、本性) の意識化のことであり、古代ギリシア人は教養・教育を、本来の人間性を思い描き、その人間像を目指して教育する過程として理解していったのである。それは人間人格の価値の発見のことでもあった。イェーガーによれば、そのパイデアーはアテーナイを超え、ローマ以降の世界史において humanism (ヒューマニズム、人文主義) の思想として、諸個人の内面と社会・文化の深部に触れながら継承され、現代社会においても「個人」という思想、あるいは「教育」の思想として生きているという。(拙論：2015年3月)

改めてイェーガーの古代精神形成の研究に目を向けてみると、古代ギリシア人の性格形成の歴史過程と教養理念形成の歴史過程との相互作用を解き明かそうとしており、いわゆる「専門」的方法に拠るのではなく、文学も重要な対象とし、古代早期から古典期までを

(ヘレニズム以降も視野に入れ)、資料的に問うている。該博な素養が前提となっていることはもちろん、古代文化の本質への総合的な洞察力、あるいは資料の微細な表出への注目を含む注意深い探究力が試されるものとなっており、その研究が恣意的な主観や解釈に寄りかかるようなものでないことは、行間からも伝わってくる。

そのようにしてイエーガーは、古代ギリシアの「精神」の本質を「パイデアー」ととらえ、文学や古代医術も含めて、その形成を問うているが、その主題設定と探究方法は独創的であり、追従を許さないものになっているように判断される。このことは、私たち日本社会の古代ギリシア研究、そして教育研究において、古代思想はまだ本当には学ばれていない、ということを示唆する。

この継続研究(3)では、大著『パイデア』の趣旨や執筆・翻訳の事情などを知るために、イエーガーによる「序文」類やハイエットによる「訳者の注記」を対象とした。「序文」と言っても、その多くは本論に対応する大事な探究的メッセージが表明されたものとなっている。

<注記と考察>

(1)アテナイの「危機」(crisis, Krisis)の時代にギリシア思想が根源的なものとして認められていったという歴史の真実に触れるとき、日本の、明治維新时期とともに第二次世界大戦の敗戦及び戦後改革期のことを思わないわけにはいかない。この歴史的「危機」は、戦前・戦後の非常に複雑な「連続」「不連続」の問題を孕んでいるが、敗戦後初期の社会及び教育の改革の理念と諸実践は、憲法と教育基本法の理念を中心に、その普遍性、つまり真に実践見通しを根拠づける原理において吟味されなければならないだろう。

2.『パイデア』全3巻の出版経緯など

『パイデア』の出版・翻訳事情、構成を知る上で、イエーガーの1961年の著作 Early Christianity AND Greek Paideia の野町啓によるすぐれた翻訳『初期キリスト教とパイデア』(筑摩書房、1964年)は大事なものである。野町による訳の「あとがき」も参考にしながら、『パイデア』の出版、翻訳出版の経緯を記すと下記ようになる。(英訳版に関しては、VOLUMEを「巻」とし、BOOKを「編」とする。またドイツ語版に関しては、Bandを「巻」とし、Buchを「編」とする。)

英訳版『パイデア』の構成は次の通りである。

第Ⅰ巻(第1編、第2編)

第Ⅱ巻(第3編)

第Ⅲ巻(第4編)

編の構成の、ドイツ語版と英訳版との対応は次の通りである(ドイツ語版の編名は1989年の一巻にまとめられた復刻版、初版は1973年、による)。なお下記の編名は暫定訳である。

第1編：ギリシアの早期

…英訳版の第1編：古代ギリシア

第2編：アテーナイ精神の絶頂と危機

…英訳版の第2編：アテーナイの精神

第3編：偉大な教育者と教養学説（Bildungssysteme）の時代

…英訳版の第3編：神的な本源を求めて⁽¹⁾

…英訳版の第4編：プラトンの時代における教養理念の論争

なおイエーガーは本研究対象の「序文」（1943年7月）でギリシア医術のことについて触れているが、「パイデアーとしてのギリシアの医術（Greek Medicine as Paideia）」の項目は、英訳版では第4編の冒頭の第1章として配置され、ドイツ語版ではその第3編の二つ目に配置されている（Die griechische Medizin als Paideia）。

出版と「序文」の経緯は下記ようになる。

ドイツ語版第Ⅰ巻の初版は1934年…本研究対象の該当「序文」は1933年10月。

第2版は1936年…本研究対象の該当「序文」は1935年7月。

英訳版の第Ⅰ巻の初版は1939年。

第2版は1945年…本研究対象の該当「序文」は1945年復活祭。

英訳版の第Ⅱ巻の初版は1943年…本研究対象の該当「序文」は1943年7月。

英訳版の第Ⅲ巻の初版は1944年…本研究対象の該当「序文」は1943年10月。

（ドイツ語版の第Ⅱ巻は1944年に、第Ⅲ巻は1947年に出版されている。）

ところで野町は前掲訳書の「あとがき」で、「…いわば、本書は、序文からも明らかのように、より膨大な形でまとめられ、大著「パイデア」の最終巻となるべきはずのものであり、そのひな形の役をはたすべきものであった。」と指摘している。イエーガーのパイデアー研究の着想は根源的であり、本研究対象の諸「序文」にも書かれていることであるが、イエーガー自身、『パイデア』執筆過程で探究の構想を膨らませていったようである。その一部は脚注にも表されることになるが、われわれは『パイデア』理解として、『パイデア』を一つの独立した存在として受け止める読み方と、『初期キリスト教とパイデア』（など）を視野に入れながら受け止めていく読み方と、その双方を適切に判断していく必要があるだろう。

<注記と考察>

- (1)「神的な本源」は、the Divine Centerの暫定訳である。英語版第Ⅲ巻の「序文」（<訳文⑤>）にも同じタームが出てくる。

3. テキストと論述の仕方

本継続研究ではテキストとして、ハイエットによる英訳版を用いる。

第Ⅰ巻：1945年：英訳版第2版：注記付き：ドイツ語版第2版からの翻訳、及び1965年版、及びペーパーバック1965年版

第Ⅱ巻：1944年：第2刷、及び1957年版

第Ⅲ巻：1944年、及び1961年版、及びペーパーバック1986年版

キータームなどは、小論の趣旨に関係してくるので、ドイツ語版との対応があるものは適宜ドイツ語を挿入し（格変化などは原文中のまま扱った）、その訳を付すようにした。ギリシア語、ラテン語の引用文に関しては、私の素養の不足からくる誤り为了避免のために、また文意は前後によって類推できるので、訳出しないでおいた箇所がある。文章中の参照事項の多くは、そのまま記してある。

小論での記述の仕方は、以下のとおりである。

- ・テキスト中の挿入の— —は、そのまま— —で表す。
- ・テキスト中の（ ）は、そのまま（ ）で表す。
- ・テキスト中のイタリック体は＜ ＞で記す。
- ・テキスト中の語句強調の‘ ’は、そのまま‘ ’で表す。
- ・テキスト中の古代ギリシア語、ラテン語はそのまま記し、その訳を《 》に記しておく。
- ・人名等については、「ホメロス」はホメーロス、「ソクラテス」はソークラテース、「アリストテレス」はアリストテレーズ、…といったように表記する。
- ・paideiaに関しては、それが主題なので、書名は『パイディア』のままとするが、訳文と考察では「パイディアー」と表す。

小論の内容は、『パイディア』の該当箇所の＜訳文＞と＜注記と考察＞、および該当範囲に関する＜全体の考察＞とで構成している。＜注記と考察＞における、本文中の人名等の確認記述は、本継続研究では重複を避けることを基本とする。

「NOTES」(「ANMERKUNGEN」)は、本継続研究では《原文注記》として＜訳文＞の各章の末尾に記していくこととする。(小論の第Ⅱ章、第1節の＜注記と考察＞(6)を参照のこと。)

Ⅱ. 訳文と注記・考察

1. 英訳版の第Ⅰ巻(英訳版の第1編、第2編)に掲載されている、ドイツ語版第Ⅰ巻初版の「序文」(1933年10月)の英訳

＜訳文①＞

序文

私は、これまで開拓されてこなかった主題を扱う歴史研究の著作を、広く公にしたいと思う。本書は、全体としてヘレニズムの新しい研究の基礎として、＜paideia パイディアー＞を、つまりギリシア人の性格(the Greek character, des griechischen Menschen ギリシア的人間)を形作っているものを、扱っている。多くの学者が、ギリシア人の国家、社会、文学、あるいは宗教や哲学の発展を叙述してきたが、誰も、彼らの性格が形成されてきた歴史過程と彼らが自分たちの人間人格の理念(ideal of human personality, des

idealen Menschenbildes 理念的な人間像)を形作ってきた知的な過程との相互作用を説明しようとはしてこなかったように見える。しかし私はこの主題を、単にそれがまだ論じられていないことをたまたま知ったということによってではなく、この重要な歴史的で知的な問題を解明することが、その後のすべての時代への消えることのないギリシアの影響の秘密である、比類のない教育的天才 (genius, Schöpfertums 創造性) のより深い理解をもたらすであろうと信じるから、取り上げたのである。⁽¹⁾

第Ⅰ巻は、英雄的な人びとに、それから市民的、政治的な種類の人格に支配された時代の、すなわち早期と古典時代の、ギリシア的教養 (culture, Bildung) の基盤、展開、そして危機 (crisis, Krisis) を叙述している。それは、アテナイ帝国の崩壊で終わる。第Ⅱ巻は、プラトーンの時代の知の (intellect, geistige) 復興を、つまり教養 (culture, Bildung) と国家 (the state, Staat) を従えようとするその格闘と、ギリシア文明 (civilization, Kultur 文化) の世界帝国への変容とを描き出すだろう。私は追って、ローマと初期キリスト教が、ギリシアに始まる教養過程 (the cultural process, Bildungsproze) にどのように引き込まれていったのかを示そうと思う。⁽²⁾

この本は学者にだけではなく、千年間の文明 (civilization, Kultur) を維持しようとする我々の時代の奮闘のなかにあって、ギリシアに近づく術を再発見しようとするすべての人びとのためにも向けられている。⁽³⁾ その執筆では、広い概括的な俯瞰を提供したいという思いと、著書のそれぞれの部分の複雑な資料をそれにふさわしい深さと精密さをもって論じ直す (rehandle, Neudurchdringung 新しく洞察すること) という差し迫った必要性との間の釣り合いをとることはしばしば困難なことであった。この特別な見地からの私の古代世界 (the ancient world, der Antike 古代) 研究は多くの新しい問題への私の注意を喚起したのであり、それは、この10年の私の教育、研究の主要な関心であり続けた。⁽⁴⁾ しかし、全体の累積的な (cumulative) 効果を台なしにしてしまわないよう、私は補巻の形式で私の成果を公刊することはしないと心に決めてきたのであって、つまりそのようなものは全体の研究を不釣り合いに大きなものにすることになったであろうからである。概して、私の見解の証明は著書それ自身によって提供されるのであって、その著書はいつも原典の解釈から出発し、それから諸事実を、諸事実が自らを説明するのを可能にする関連性のなかに置く。⁽⁵⁾ 脚注 (footnotes) は、古典の著者からの引用の一節に、またもっとも重要な現代の文献 (literature, Literatur) —とくに教養の歴史の問題に直接的に関連しているもの—to参照箇所を示している。込み入った説明が不可欠であるところは、私はめったにそれを注 (notes, Anmerkungen 注⁽⁶⁾) の形式で示すことはできなかった。私はそれゆえに、私の研究のそのような部分のいくつかは、独立した研究論文として発表してきており、それは簡潔に脚注に引いてあるが、残りは追って公刊しようと思う。私の著書と論文とは一つの全体を構成しており、いつもお互いに支え説明しあうものとなっている。

序論において、私は歴史におけるギリシア的パイディアの位置を、より一般的な見地から素描するように努めた。私はまた、ギリシア的範型 (type, Form) の教養教育 (cultural education, der Menschenbildung 人間形成) についての我々の理解が、我々の時代よりもずっと前の世紀のヒューマニズム (the humanism, dem Humanismus) と我々との関係に、どのように影響するかを簡潔に指摘した。⁽⁷⁾ この問題は今日、以前よりも熱心に論議されている。明らかにそれは、現代において、本書で扱っているような歴史研究によって

は解かれ得ないのであって、なぜならそれはギリシア人ではなくわれわれ自身に関わっているからである。⁽⁸⁾ しかし今日でも、ギリシア的教養 (culture, Bildungsphanomens 教養の現象) の徹底的な、根源的な理解 (a thorough and fundamental comprehension, die Wesenserkenntnis 本質的認識) 抜きにはいかなる教育の意図や知識をもつことも不可能である。私のこの問題についての科学的関心を生み、それによってこの著作を生んだのは、この確信であった。⁽⁹⁾

ベルリン-ヴェスト=エント

1933年10月

ヴェルナー・イエーガー

<注記と考察>

- (1) 著書全体の根本主題が、古代ギリシア研究の概括的な状況把握とともに、明示されている。
- (2) 第Ⅰ巻、第Ⅱ巻の構成の趣旨が述べられている。ここでは「第Ⅲ巻」のことが述べられていないので、ドイツ語版第Ⅱ巻はドイツ語版第3編全体を収めるものとして書かれていると判断される。第Ⅱ巻の最初の意図が変更されたことについては、英語版第Ⅱ巻の序文で説明されている (<訳文④>)。なお、ローマと初期キリスト教のパイデイアーとの関連研究の執筆のことが予告されており、小論第Ⅰ章2項で引用した野町の指摘に相応する。
- (3) イェーガーは、現代の社会的な格闘へのつよい関心をもってパイデイアー研究に向かっており、古代研究という限定された「専門性」に逃げることはなく、自らのパイデイアー研究として現代の思想問題にも具体的に言及していく。イェーガーは、古代ギリシアのパイデイアー認識の形成をそのような性質をもつものとして理解しており、このことは本書の重要な特徴となっている。
- (4) 個々の資料のより深い再把握を進めることと全体の構成・論旨の明瞭化を図ることとのバランスをとるといふ、研究行為の生き生きとした緊張のありようが述べられているが、このことは、イェーガーの研究主題のスケールの大きさとそれに相応する著作規模のことを考えると、著作『パイデイアー』の意義をよく示している。イェーガーは、研究過程で次々と新たな問題を見いだしていったようであるが、その文章には、執筆しながらも考えることが次から次へとあふれ出てくるような趣きがあり、読み取りにおいて油断を許さないものがあるが、それが本書の魅力ともなっている。
- (5) イェーガーの叙述は、文献・資料の縦横の選択の仕方やその注目の仕方自体が、(素養の乏しい筆者にも) 本質性、必然性をもってのように直観させられるが、それらの資料の配置の仕方が考え抜かれていて (文脈の洞察が行き届いていて)、個々の資料が生命力を回復してくるよう感じられてくる。そのことは本文叙述によく現れており、本書の類例のない魅力になっているように思われる。もし現代的な、狭義の「認識論」的関心からのみギリシア思想を覗き込もうとすると、それは現代からのみの一方通行の関心の向け方になり、したがって狭義の認識 (論) に該当する事象以外の歴史の真実に光を当てる契機をもたないことになるだろう。このような場合は、歴史事

情そのものへの本質的関心はないというべきだろう。イエーガーは、ポリス・アテーナイの危機の時代を焦点にして、古代ギリシア人のそれぞれの時代の格闘を捉えようとし、その中核に「パイデアー」を観たのである。

- (6) 注記は、ドイツ語版第Ⅰ巻（第1編、第2編）は、復刻版においても、「脚注」として本文ページの下部に掲載されているが、英訳版は第Ⅰ巻から「NOTES」として巻末に掲載され、ドイツ語版第Ⅱ巻、第Ⅲ巻も英訳版の体裁に準じて「ANMERKUNGEN」として巻末に掲載されている。この注記については、私の継続研究では《原文注記》として訳文の章の末尾に記していくこととする。なお拙論（2015年3月）において、原文注記の有無について錯覚して記述した箇所がある：第Ⅱ章第7節〈注記と考察〉(5)。

- (7) イェーガーは序論において、古代ギリシアのパイデアーがローマにおいてフーマーニタース (humanitas) として継承され、それがヒューマニズム (humanism 人文主義) の思想の核心になっていったと指摘している。なおヒューマニズムという言葉は使われていないが、ギリシア思想を西欧における「個人」の認識の始まりであると述べている箇所もあり、ここでの指摘に該当しよう。(拙論2015年3月、第Ⅱ章の4節、8節)

ところで、このパイデアー～フーマーニタース～ヒューマニズムの脈絡は、今日の研究や思想研究においては、すでに知識の一つになってはいる。しかしこの重要な脈絡を、たとえば教育の諸研究の実質に窺うことはむづかしい。

- (8) ここはイエーガーが、具体的な論争状況を念頭に置きながら、課題の困難さをより一般的、本質的な問題として考察している箇所である。古代研究としても、現代社会が孕む思想的問題との脈絡は、古代研究それ自体のなかでは論究されないにしても、重要である。この容易ではない課題を、イエーガーはパイデアー研究の主旨に関わって見つめている。

- (9) イェーガーの長年月にわたる古代研究の、その究極的「結論」というべきことが簡潔に示されている。なおこの序文からは、序論の独自の重要性が見えてくる。

2. 英訳版の第Ⅰ巻に掲げられている「ドイツ語版第2版への序文」(1935年7月)

〈訳文②〉

ドイツ語版第2版への序文

『パイデア』第Ⅰ巻の再販が一年半後に必要とされるに至ったことは、著書が速やかに共鳴者 (friends, Freunde) を得たのだという勇気づける徴候である。その最初の刊行からの時間は余りにも短すぎて、私は本文の大規模な変更には取りかかることはできなかったのだが、しかしこの機会を利用して若干の書き間違いを訂正することができた。⁽¹⁾

それはそうと、この本の本質に属することであるが、それが引き起こした批判や論議の大部分は、言ってみれば、一つの明確な歴史概念 (conception of history, Geschichtsbild 歴史像) が多数の異なる人間にもたらす、その衝撃によって引き起こされる反響のような

ものである。それはさらに、歴史研究の目的と方法に関する論争の口火となったが、私はここではこれ以上立ち入って論じることができない。⁽²⁾ 私のギリシア史に対する態度に理論的基礎を与えることは別個の本を求めることになるであろうが、私は、それを取り入れるように私を導いた諸事実によってそれが確かめられていくことの方を好む。この著書で体现されている種類 (type, der Aspekt 見方) の歴史が、伝統的な意味での歴史、つまり出来事の歴史、に取って代わることは、意図されていなければ可能なことでもない、ということを行う必要はほとんどない。しかし、人間の典型 (ideals) を代表する創造的な作品 (literature, Werken) を通して人間の生存 (the life of man, das geschichtliche Sein des Menschen 人間の歴史的ありよう) を説明するという、そのような方法で歴史を叙述することは少なからず必要であるし正当なことである。ギリシア史の数百年 (たとえばその古代) が言及に値する他の種類 (type) の物証を提供しないという事実は別として、作品は、われわれが他の資料から知る時代においてさえ、過去の精神生活へのわれわれのもっとも直接的な接近方法である。⁽³⁾ その理由で、作品はこの本の主要な関心となるのであって、つまりこの本は、ギリシア人のパイデИАーを、そして同時に、人類 (mankind)⁽⁴⁾ のパイデИАーとしてのギリシア人自身を、描写することが意図されているのである。

1935年7月

ヴェルナー・イエーガー

<注記と考察>

- (1) 第Ⅰ巻の発刊時の反響をうかがい知ることができる。
- (2) イェーガーの問題提起が引き起こした衝撃のことが記されている。ここからも、イェーガーのパイデИАー研究の根源性を直観することができる。
- (3) イェーガーは、一般的な古代哲学研究、古代史研究の方法とは異なり、パイデИАー研究に不可欠なものとして (文学) 作品 (ホメロス等々) にも注目している。ここでは、作品を資料とするのは、「過去の精神生活 (過去の内的な生活 dem inneren Leben der Vergangenheit)」を知っていくための、本質的な探究方法なのだと述べている。
- (4) 「人類のパイデИАーとしてのギリシア人自身」とは (mankind はドイツ語版にはないが)、特殊な「ギリシア人のパイデИАー」を世界史的普遍性をもつものとして描写する、という意味であろう。

3. 英訳版の第Ⅰ巻と第Ⅱ巻には、表紙裏に次の文章がある。

<訳文③>

<Paideia パイデИАー>は、この著書の題目であるが、単なる象徴的な名称ではなく、この著で提出されている実際の歴史的な主題の唯一の的確な名称である。もちろんそれは、定義をすることが難しいことがらであり、他の広範な包括的な概念 (たとえば <philosophy 哲学>、あるいは <culture 文化>) と同じように、それは一つの抽象的な

空虚な言葉（formula）の中に閉じ込められることを拒む。その完全な内容と意味は、われわれがその歴史を読み、それが自らを実現しようとする試みを追うときにのみわれわれに明らかになる。⁽¹⁾ ギリシア人の言葉をギリシア人のことがらに使うことで、私は、それが現代人ではなく、ギリシア人の目で見えるということを暗示しようとしている。＜civilization, culture, tradition, literature 文明、教養、伝統、文学＞あるいは＜education 教育＞のような現代の表現を導入することを避けるのは不可能である。しかしそれらの一つも、ギリシア人がパイデИАーで意味しようとしたことを本当に包含するものではない。それらのいずれも、その一つの側面に限られているのであって、それらは、われわれがそれらをすべて合わせて使わなければ、ギリシア語の概念と同じ範囲を含むことはできない。しかし、まさに古代学（scholarship 学問）⁽²⁾と学術行為（scholarly activity）の本質が、これらすべての側面の元来的な統一性に基礎を置いているのである—つまりギリシア語で表現されている統一性—ということなのであって、現代的な展開によって強調され仕上げられた多様性—ということではない。⁽³⁾ 古代人は、教育や教養は、一国民の精神生活の実在する歴史構造とは性質が異なる、形式的技術や抽象的理論といったものではない—ということを確信していた。彼らは、それらが作品（literature）のなかに具現化されていると考えたのであって、つまり作品は高尚な教養そのもの（all higher culture）の生き生きとした（real）表現なのである。⁽⁴⁾ そういうやり方で、われわれはプリュニコス⁽⁵⁾によって与えられた教養ある人間の定義を解明しなければならない。（s.v. φιλόλογος, p.483 Rutherford）

Φιλόλογος ὁ φιλῶν λόγους καὶ σπουδάζων περὶ παιδείαν

<注記と考察>

- (1) この探究意識はイエーガーのパイデИАー研究の本質的特徴となるものである。この探究の対象と方法の意識からは、第1に、パイデИАー研究には、並々ならぬ素養と洞察力、明晰さ、情熱が要るということ、第2に、「パイデИАー」は簡単に現代に「翻訳」できるものではないということ、が理解される。
- (2) scholarship には、(人文学の) 学問、という意味もあるので、ここでは classical を補って「古代学」と訳しておいた。
- (3) どのような文化も、時代が下るに従い、その内容は分化しつつ発展し、独自の意味を獲得していくことになるが、そのような「現代」から時代を遡り、古代ギリシア思想そのものの生きた本質を捉えるという、古代学の課題と方法のことが言われている。
- (4) イェーガーが重視する、(文学) 作品と教養・教育の意識との本性的脈絡は、現代においても変わらないと言えるのではないか。広く文学は、根底において「人間性」や「個人」の目覚めという思想を問うているのであり、文学思潮と教育思潮との一致という経験や、生活綴方や生活記録、自分史といった、「綴る」教育実践も、古代ギリシアの教養・教育の思想と共鳴するものとして考えるべきではないか。
- (5) プリュニコス：前6世紀後半から前5世紀前半に活躍したアテナイの悲劇詩人で、「アイスキュロス以前の最大の悲劇作家として名声を博し、その作品は後世まで愛好された。」という（松原國則著『西洋古典学事典』京都大学学術出版会、2010年）。

4. 英訳版の第Ⅱ巻（英訳版の第3編）には下記の序文がある。（W. イェーガーによる1943年7月の序文）

<訳文④>

序文

この著作の第Ⅰ巻執筆の10年後に、第Ⅱ巻が今や出版される。第Ⅲ巻がそれにすぐ続く予定だ。この序文はその両方を紹介するものであるが、それは、それらが相互に全著作の中で一つの独立した単位を構成しているという特別の理由に因るのであり、というのは、双方とも、紀元前4世紀、つまりプラトーンの時代における古代ギリシアの知的な歴史を扱っており、それゆえ相互に補い合っているからである。これらの二つの巻は、古代ギリシアの古典期の歴史を終わらせる。⁽¹⁾ 古代後期の諸世紀を貫いて継続出版を計画することは魅惑的であって、というのは、古典期に確立された教養理念（the ideals of paideia）は、グレコローマン文明（civilization）のさらなる発展と拡張において非常に支配的な役割を果たしたからである。私は以下に、この拡大された計画の簡潔な概要を説明しよう。しかし私は、そのような理想を実現できるかどうかは別にして、ギリシアの生涯のもっとも偉大な時代を対象とする私の著作を完成するという機会が与えられる巡りあわせに感謝するのであって、その時代は、この世のあらゆるもの—国家、権力、自由、それに言葉の古典的な意味における市民生活—を失った後になお、その最後の偉大な詩人であるメナンドロス⁽²⁾ とともに、‘誰も人から奪うことのできないもの、それは教養（paideia）である’⁽³⁾ と述べることができたのである。この巻の題扉のために選ばれた言葉、‘教養はすべての人間にとっての避難所である’（Monost. 2 and 312）を書いたのも同じ詩人であった。⁽³⁾

もし我々が歴史の本質を個々の国民の有機的な生活にあると信じるならば、我々は四世紀を、ギリシアの政治的力のみならず、ギリシア社会の内部構造の衰退がより進んだ段階として考えなければならない。その見地からすれば、我々は、この時期がなぜこのような長さの扱いを正当化するほど重要なのかを理解することは不可能だと考えるだろう。しかし、教養（culture）の歴史においては、それは比類のない重要性をもつ時代である。政治的災難の増大する陰鬱さとおして、今や、時代の必要によって生み出されたかのように、哲学と政治的修辞学の古典的学説をもって、偉大な教育の天才たちが現れる。彼らの教養理念（cultural ideals）は、それは彼らの国家が独立した政治的な存在であることを止めた後も生き延びたのであるが、人間性（humanity）の可能な限りの優れた表現として、古代の他の人びとや後に来る人びとへと伝えられた。それをあの超時間的な光のなかで、つまり政治的、精神的な自己保存（self-preservation）を獲得しようとする彼らの時代の挫折させられた苦々しい闘い—その闘いとは、ギリシア人が、真の教育と真の教養の本質（the nature of true education and true culture）を確定する（determine）努力だと個性的に理解したものである—からは自由に、探究することは通例のことである。⁽⁴⁾

しかしながら私は、この研究の最初から、極めて異なったことを成そうと、つまりギリシア人の教養理念の社会的な構造と機能をその歴史的背景に照らしながら説明しようと、努力してきた。私が、これらの二つの巻でプラトーンの時代を扱ってきたのはそういう意図であり、それらが何がしかの価値をもっているとすれば、それらはとくにプラトーン哲

学の理解に役立つだろう。というのは、彼自身は、自分の哲学が思想の特別な情勢のなかで現れていること、そしてギリシア精神の全発展のなかで特別な歴史的位置をもっていることを非常によく知っていたので、彼はいつも自分の論証（dialectic）に対話という戯曲形式をとらせ、当代のさまざまな種類の意見を代表する者たちの間の論争から始めさせた。⁽⁵⁾ 他方、決して偉大ではない著述家は、歴史において永続する唯一の要素は精神なのだという真実を、単に彼自身の思想が何千年も生き残ったという理由ではなく、早期のギリシアが彼の中に生き残っているという理由で、いっそう明瞭にさらけ出すことになる（reveal）。彼の哲学は、ギリシア人の文化（Hellenic culture）の先行する段階を復元（reintegration）したものである。というのは、プラトーンは、慎重に、そして系統的に、前プラトーンの時代のさまざまな問題を取り上げ、それらをより高度な哲学的水準で解決するのである。この意味で第Ⅰ巻の全体（前ソクラテースの思想家を扱っている節だけではなく、むしろ、立法者と詩人に関する節も）が、プラトーン研究入門とみなされるべきである。この巻と続く巻をとおして、それらの先行者たちはすでに読まれていることが前提にされている。⁽⁶⁾

再び、プラトーン（彼はギリシア的教養（*paideia*）の歴史とされるもの全ての頂点であるに違いない）に、彼の著作および人格と、通常はまるで哲学とは関係がないかのように研究される同時代の他の偉大な人物のそれとの差異による、間接光が当てられる。私は、四世紀における教養（culture）の優位性を求めている哲学的勢力と反哲学的勢力との対抗を、我々の全体を理解することを損なったり、今日に至るまでヒューマニズム（humanism）の歴史において根本的なものである、この対立の状況を覆い隠したりしなければ、解体されることはない、たった一つの歴史劇であると理解しようと試みてきた。⁽⁷⁾

私は、‘四世紀’という言葉づかいを厳密に編年体的な意味では用いてこなかった。歴史的には、ソクラテースはその前の世紀に属しているのであるが、しかし私は、彼をここではプラトーンの時代のはじまりの知的な転換点とみなしてきた。彼のほんとうの影響は死後に、四世紀の人間が彼の人格と重要性について論じはじめたときに始まったのであり、われわれが彼について知っていることはすべて（アリストファネースのカリカチュアは別にして）⁽⁸⁾、彼の死後に名声を上げた彼の同時代の若者たちへのこの影響の文学的反映なのである。私は第Ⅲ巻で、人間の本性（the nature of man）の理論として医術を、それがソクラテースとプラトーンの教養（*paideia*）の構造につよい影響をあたえていると考えるので、論じる気にさせられた。⁽⁹⁾ 私の第Ⅱ巻を、ギリシア的教養（culture）が世界支配を達成する時代まで進めるといことが、私の最初の意図であった（第Ⅰ巻序文を参照のこと）。この計画は今や放棄されたのであるが、それは、四世紀における教養（*paideia*）の二つの主要な代表物をより完全に分析することのほうを選んだからであって、その二つとは哲学と修辞学であり、そこに、後の時代におけるヒューマニズム（humanism）の二つの主要な形態（forms）が由来しているのである。ヘレニズムの時代は、それゆえに別の著作で取り扱われるだろう。アリストテレースは、テオプラストス⁽¹⁰⁾、メナンドロス、エピクローロス⁽¹¹⁾と共に、ヘレニズムの時代、つまりその生きた根が四世紀に深く入り込んでいた時代、の初頭で論じられるであろう。ソクラテースのように、彼は二つの時代の過渡期を示す人物である。しかも、知る人ぞ知る大家であるアリストテレースと共にパイデイアーの概念はその熱烈さの著しい低下を経験するのであり、

このことは、彼をパイデイアーの真の哲学者であるプラトーンの横に配置することを困難にする。教養 (culture) と科学 (science) との関連に関わる諸問題は、それはヘレニズムのアレクサンドリアの特質であるが、アリストテレスの学校において初めて明瞭に現れる。⁽¹²⁾

これらの二つの巻で叙述された四世紀の教養論争 (cultural disputes) と、人を高尚にする洗練された教養 (humane civilization) のローマへの影響とに加えて、ヘレニスティックなギリシア的パイデイアー (paideia) のキリスト教のパイデイアーへの変容は、この研究の最大の歴史的テーマである。もしそれがまったく著者の意思次第であるということであれば、彼の研究は、キリスト教がギリシア化され (Hellenized)、ギリシア的な高い教養 (Hellenic civilization) がキリスト教化される広大な歴史的過程の叙述で終わることだろう。ギリシア的精神とキリスト教との間の、相互に他を従え、あるいは同化しようとする、熱烈な、数百年にもわたる論争の、そしてそれらの最終的な統合の、下地をつくっているのはギリシア的教養 (Greek paideia) であった。歴史の、それらの独特な異なる時代を扱うだけではなく、この著書の第Ⅱ巻と第Ⅲ巻は、古典時代のギリシアの高い教養 (civilization) と古代後期のキリスト教の教養 (the Christian culture) との間の割れ目に橋をかけようとしている。⁽¹³⁾

扱いは私の資料の性質に論理的に規定されていたわけだが、その資料は、ギリシア的パイデイアー (paideia) が現れている、あらゆる多様な形態、差異、階層、そして水準が、その個々の角度からも典型的な角度からも、注意深く識別され、描写され、分析されなければ、十分に理解され得ない。必要とされているのは、真の歴史的意味における、教養 (culture) の形態学である。‘ギリシア的教養の理念 (ideals of Greek culture)’ というものは、社会学的抽象の空虚な空間に単独に掲げられるべきでも、普遍的な類型 (universal types) として扱われるべきでもない。ギリシア人の精神によって生み出された、どのアレテ (arete) ⁽¹⁴⁾ の形態も、あるいはどの新しい倫理的規範もみな、それが引き起こされた時と場所—それを呼び起し、それと闘った歴史的な勢力に取り囲まれており、またそれに典型的な芸術形式を与えた偉大な創造的な著述家の作品の中に具体的に表されている—において研究されなければならない。⁽¹⁵⁾ 歴史家は、彼が現実の知的な様相に関心をもつときは、外的な行動を報告し人物をありありと描写するのに劣らず客観的に、視界に入ってくるあらゆる重要な現象を記録するのに違いないのであって、それはホメーロスのなかの皇子たちに表現された人格の典型 (the ideal) かもしれないし、ピンダロスの詩歌の英雄的な若いアスリートに反映している貴族社会かもしれないし、あるいは自由市民の典型 (ideal) をもつペリクレースの時代の民主主義かもしれない。どの相 (phase) もみな、巨大な古代ギリシア人の帝国 (Hellenistic empires) の時代を特徴づけ、またキリスト教徒の生活 (life) 概念への移行期を形作っている、世界の哲学的市民の典型 (the ideal) と ‘超俗的 spiritual’ 人間という新しい貴族とに、だれもかれもが取って代わられるまでは、ギリシア文明 (Greek civilization) の発展にそれ独自の永続的な貢献をなした。これらの相のいずれにおいても、その本質的要素は後の時代まで生き続けた。この著作は、ギリシア的教養 (culture) がその前の自己を破壊することによってではなく、いつもそれらを変容させることによって発展してきたということをたびたび指摘する。流通していた貨幣は、価値がないものとして打ち捨てられることはなかった。それは新しい刻印

が押された。フィローン⁽¹⁶⁾の規定（rule）である、μεταχάραττε τὸ θεῖον νόμισμα が、ホメロスから古代後期の新プラトーン主義、そしてキリスト教教父まで、ギリシア的教養を支配した。ギリシア精神は、以前に達した超越的な高さで働くが、しかしそれが働く形式（form）はいつも厳格な連続性という法則によって支配されている。

この歴史的過程のすべての部分は、一つの段階（a stage）であるが、しかしどの部分も単なる一つの段階といったものでも、ましてや無などではない。というのは、ある偉大な歴史家が述べたように、どの時代も‘神と直接的に接触している’のである。すべての時代（age）は、それ自身のために評価される権利をもっているのもであって、その価値は、それが単に他の時代（period）をつくるための道具に過ぎないという事実にあるのではない。その、歴史の全般的な概観における根本的な位置は、それ自身の最高の達成に対し精神的、知的形相（form）を与える力にかかっている。というのは、それがもっと後の世代に、多かれ少なかれ、強くいつまでも影響を与えるのは、あの形相（form）をとおしてだからである。歴史家の役目は、我と自分の文化（culture）、社会を完全に忘れて、ほかのもっと生き生きとした世界の生活、感情、そして色彩に深く飛び込むために、またそのようにして、ちょうど詩人が自分の気質（his characters）を生活の呼吸で充たしていくのとまったく同じ方法で、見知らぬ生活と馴染みのない感じ方の状態に考えてなるために、自分の想像力を使うことである。このことは、人間だけではなく、過去理想（the ideals）にも適用される。プラトーンは我々に、詩人と詩人が描く英雄たちとを、また詩人の理想（ideals）と彼らのものとを混同しないように、そして彼らの矛盾する考え（ideas）を、我々が詩人自身のものとする学説を組み立てることに用いないように戒めてきた。同様に歴史家は、偉大な人たちの闘いで表面化する対立的な考えを調停しようとしたり、それらを批判しようとしたりすべきではない。彼の仕事は世界を改善することではなく、それを理解することである。彼が扱う人物たちが論争のなかにあるのはもっともなことであり、それによってお互いを限定しているのである。彼は、彼らの二律背反を解決することを哲学者に委ねなければならない。それにもかかわらず、このことは、ものの見方（the mind）の歴史を純粹に相對主義の問題にすることにはならない。歴史家はもちろん、誰が絶対的な真理をもっているかを決める、と約束すべきではない。しかし彼は、歴史の範型（pattern）や、価値についての真の宇宙創造、あるいは国家や国民の誕生と消滅を超えて生き続けるであろう理念的（ideal）世界、などの主要な輪郭を描くために、トゥーキュディデースの客観性の基準を大々的に用いることができる。それによって彼の著作は、歴史的な凝視（historical contemplation）の精神から生まれる一つの哲学劇となる。⁽¹⁷⁾

（前）四世紀のパイデア（paideia）の歴史を叙述するとき、歴史家の資料選択は、生き残ってきた証拠の種類（type）によっておおむね決まる。文書は、古代後期においては、もっぱら教養理念（the ideal of paideia）との関連性のゆえに保存として選ばれたのであり、実際に、その見地からみて典型的な重要性を欠いていると思われる文献はすべて朽ちるに任せられた。ギリシア的教養（paideia）の歴史は、古典原本の、伝達と手書きされたものの存続との歴史に直接的に溶け込んでいる。⁽¹⁸⁾ そのことが、四世紀以来保存されてきた文献の実際の特質（character）と量がわれわれの目的にとって重要だという理由である。あの時代から生き残ってきているすべての書物が、それら全部の中に教養の観

念 (the idea of paideia) がどのように意識的に生き、それらの形式 (form) を支配しているかを示すために、この研究において論じられる。このことの唯一の例外は、法廷の雄弁術である。その非常に多くのものが伝えられてきているけれども、それはここでは単独には扱われない。そのことは、それが教養 (paideia) と何の関係もないという理由からではないのであり、というのはイソクラテースとプラトーン⁽¹⁹⁾はしばしば、リュウシアース⁽²⁰⁾とその同僚たちは高等教育の代表者であると主張した、と述べているのである。そのことの理由は、政治的弁論術がすぐに、法廷の (juridical 裁判の) 修辞学の教師たちによってなされた仕事の影を薄くさせたということである。弁論術の両方の分野を詳細に扱うことは、資料が非常におびただしいので、实际的でも望ましくもないであろうし、実際にイソクラテースとデーモステネース⁽²¹⁾は、法廷弁論 (court-speeches) を書いた者たちよりも、よりつよい印象を与える雄弁家なのである。

プラトーンに関する研究は、今ここにある二つの巻のなかのそれだけの内容で一冊の本を形成する。彼は長年私の関心の中心に在り、したがって当然にも私の彼に関する研究は、私の著書の構想で決定的な役割を果たした。私が20年ほど前に考えていたことは主としてプラトーンについてであり、そのころ私は学者たちの関心を、ギリシア人がパイデア (paideia) と呼んだギリシア史のあの角度に引き付けようと試みていた。私はそのころ、<Platos Stellung im Aufbau der griechischen Bildung (Berlin 1928)>という題目の連続講義で、私がここで彼を研究してきた見地のことを述べたが、もちろんそれよりも早く、私の小論<Platos Staatsethik (Berlin 1924)>でも述べており、それは本文で参照されている。⁽²²⁾ 私の考えは、私の弟子たちによって発表されたプラトーンに関するたくさんの論説 (articles)、研究論文 (monographs)、学位論文 (dissertations) によって広められてきたし、その直接の仲間を超えて多少の影響をもってきたのであるが、しかし私は今まで、それらを一つの関連した全体と考えることは一度もなかった。著作が完成したのでそれを概観してみると、私はプラトーンの『ティマイオス』の章が、彼の宇宙概念と彼の哲学が根本にもっている教育・教養的傾向との関係を考察するために、在ればよかったのだと思いたいくらいだ。⁽²³⁾ アカデーメイア⁽²⁴⁾をさらにもう一度叙述する代わりに、私の読者に、私の<Aristotle>⁽²⁵⁾のそれに関する章を指示するだけで十分だろうし、それに私はギリシアの哲学的な神学のために、近く出版される予定の著作を思い切って引用した。私のギリシア医術に関する章のための予備的研究はこの本の限界を超えて大きくなり、独立した著作として出版された (<Diokles von Karystos>)。同様に、私のイソクラテースとデーモステネースについての論は、私が以前に発表した研究論文に基づいている。

注記はここでは、『パイデア』第1巻よりもはるかに膨大になっている。最後にそれらすべてを分類する必要があったのだが、そのことは、著作を使うかもしれない学者たちのことを考えると残念である。しかし私は、より多くの一般の人が著作を読んで励まされるであろうということを期待し、またこの時代にそのような規模の著作を出すことによって出版社が冒すことになった危険のことを十分に認識し、同意した。私はまた、私の著書の判型と印刷のために出版社が払った労に対し、心より感謝しなければならない。

私は、私の著書の翻訳者であるコロンビア大学、ニューヨーク、のギルバート・ハイエット教授にとくに感謝するものであって、つまり彼は、軍部局の⁽²⁶⁾より切迫した職務で忙しかったにもかかわらず、私のドイツ語の原稿を相当の困難さのもとで翻訳すること

を完了され、しかもそれを、翻訳物ではなく、本物の英語の本にされたのである。そのうえ彼は、あらゆる種類の編集上の問題を解決することを手伝うことによってだけではなく、すべての不確かな部分を点検し論議することによって翻訳に貢献された。私は、彼がこの著書へ、その三つの連続する巻の全体にわたって、飽くことのない関心を示されたこと、つまり彼はこの著書のために彼自身の研究生活の数年間を放棄したのであり、そのことに対し、また彼が私の研究を英語圏に迎え入れることのためになした計り知れない貢献に対し、彼に公式に感謝したいと思う。⁽²⁷⁾

私はまた、私の助手であるヘレン A. ブラウン博士に、私が第Ⅱ巻の索引を作成するのに援助してくれたことに対し、感謝したいと思う。

ヴェルナー・イエーガー

ハーバード大学

ケンブリッジ、マサチューセッツ州

1943年7月

<注記と考察>

- (1) 英訳版の第Ⅱ巻、第Ⅲ巻の内容である第3編、第4編は、ドイツ語版（一卷本）では第3編として一まとめにされている。＜訳文①＞の＜注記と考察＞(2)を参照のこと。
- (2) メナンドロス：前342年頃～前292年頃。アテナイの新喜劇の作家。
- (3) ここで文学的に言われていることは、世界史において日常的に試練を受け続けている、実存的な経験事項であり、「教養」の本性について直観させるものがある。
- (4) 古代ギリシア思想・哲学の受け止め方の一般的傾向、つまり、それをギリシア人たちの歴史的な格闘から離れて超歴史的に解釈していくという傾向、のことが指摘されている。
- (5) ここの前後でイエーガーは、プラトーンが「対話篇」という論証形式を採ったということの基本的意味について、自らのパイデアー研究の観点と重ねて論じている。
- (6) 第Ⅰ巻と第Ⅱ、第Ⅲ巻との構造的な関係の説明。前記（1）を参照のこと。
- (7) 四世紀を、教養をめぐる哲学的勢力と反哲学的勢力との対抗を軸に理解していくことは、主観的なテーマ選択なのではなく、歴史の本質認識そのものなのだ、とイエーガーは述べている。
- (8) アリストファネスの喜劇『雲』のことで、この中でソークラテースは戯画化されて描かれている。なおこの内容が重大な意味を帯びるにいたったことが、対話篇『ソークラテースの弁明』で、「ソークラテース」から語られている。
- (9) nature は、「自然」であり「本性」である。「自然 nature」という概念を発見したギリシア人は、いよいよ医術において、それを人間にも適用していく。さらにソークラテース・プラトーンは、徳性を本質とする human nature の探究に入っていく。
- (10) テオプラストス：前372年頃～前288年頃。ギリシアの哲学者、科学者で、植物学の祖と言われている。アリストテレースの弟子として、アリストテレースによる学園「リュケイオン」（前335年に開設、「ペリパトス περιπατος（散歩、遊歩路、散歩しながら議論すること、逍遙学派）」とも呼ばれる）の創設に関わり、その第二代の学頭にもなっている。

- (11) エピクローロス：前341年頃～前270年。ギリシアの哲学者で、デモクリトスらの原子論を継承しつつ原子論的唯物論を唱えた。レスボス島のミュティレネで若者たちに公開で哲学を説き（前311年頃）、アテーナイに移ってから「庭園学校」と呼ばれる学園（質素な共同生活をしながら哲学に勤しむ）を創設した（前307年）。すでにアテーナイはマケドニアに制圧され（前322年）、ポリスは其の独立性を失っており、エピクロースは公共的生活に関与しないことを勧め、「心の平安（アタラクシア *αταραξία* 不動心）」を旨とする哲学を探究した。
- (12) 教養と科学（数学、天文学、音楽理論、など）との関連に関わる諸問題は、現代へと直結していく重要な性質をもつ。その問題の古代史における成り立ちと、アリストテレスが著書『パイデア』に入らない理由とが説明されている。

なお岩崎允胤は、アリストテレスの諸論文が著作として編まれていく過程を説明しつつ、イエーガーのアリストテレス研究の画期性について次のように述べている（岩崎『ギリシア・ポリス社会の哲学』未来社、1994年）。

…このようにして、今世紀になって W. イェーガーがアリストテレス哲学をその発展においてとらえる画期的な視点にたつ研究成果を公にするまで、歴史を通じて、かれの哲学は、久しいあいだ、そのなかに橋渡しの困難な矛盾がみられるにもかかわらず、あたかもそれ自身として統合された、いわば完結した体系として受け取られてきた。…（中略）…こうしてイエーガーは、アリストテレスの思想発展を、プラトン哲学の色彩がしだいに稀薄となり実証的性格が濃厚になってゆく過程として描いた（W. Jaeger, Aristotle, 1923）。（小論引用に際し、岩崎の自著の参照頁記述は略した。）

- (13) 古代ギリシア思想と初期キリスト教との脈絡を問うことは、イエーガーのパイデア研究の重要な眼目である。このような「ギリシア的教養」の歴史的探究は、教養・教育、あるいはヒューマニズムとキリスト教との関係に関わって、たとえば南原繁（1889年～1974年）の思想を受け止めることなど、私たちに新鮮な問題意識を喚起してくれる。
- (14) アレテ *ἀρετή*：すぐれていること、長所、美德、勇気、英雄的行為。
- (15) イェーガーのパイデア研究の本質となるもので、ギリシア的パイデアは、それが意識化されていく歴史的諸関連のなかでのみ理解され得るとする。
- (16) フィローン：前30～20年頃～後40～50年頃。アレクサンドリアに生まれたユダヤ人で、モーセ五書を、ギリシア哲学・文化の影響をつよく受けながら解釈し、「モーセの哲学」を展開した。その思想は新プラトン主義哲学や古代キリスト教教父たちに大きな影響を及ぼしたとされる（『岩波 哲学・思想事典』1998年、松原國師『西洋古典学事典』京都大学学術出版会、2010年）。
- (17) トゥーキュディデースの（未完の）『戦史』は、単なる歴史の叙述ではなく、イエーガーが述べるような歴史の本質を浮かび上がらせており、今日もみずみずしい。古代ギリシアの文学も演劇も、そして歴史書も、その本性は真実の探究を誘う「哲学」である。

- (18) イェーガーは、限られた文献・資料が今日へと生き残って伝えられてきたという事実そのものに、古代社会とそれを受け継ぐ時代の関心のありようを見ている。イェーガーはこの着眼を、独自の古代探究の方法として各所で繰り返し述べている。
- (19) プラトンは、諸対話篇でイソクラテスを批判対象の文脈で登場させているが、唯一、『パイドロス』（藤沢令夫訳、岩波文庫）の巻の終わりでは、彼に対する深い賛辞をソクラテスの口から語らせている。この箇所については、訳者藤沢はとくべつに長い注記を付し、「…これを書いたプラトンの動機にはいろいろ複雑なものがあつたと思われる…」と述べている。なお、この藤沢の注記全体が教養論争に対応している。
- (20) リューシアース：前450年頃～前380年頃。法廷弁論の大家。
- (21) デーモステネス：前384年～前322年。アテナイの政治家・雄弁家で、反マケドニア運動を主導した。なおイソクラテスの政治認識を、いわゆる「汎ギリシア主義」と見るか否かの論議については、廣川洋一『イソクラテスの修辞学校—西欧的教養の源泉—』（講談社学術文庫、2005年、p.149）などを参照のこと。
- (22) イェーガーのパイデア研究におけるプラトンの位置が明確に語られている、きわめて重要な箇所。イェーガーは、アリストテレスとの関係においても、プラトンにおいて（イソクラテスの反駁を含めて）古代ギリシア人たちのパイデア探究は区切りをもっていると理解している。前記（6）を参照のこと。
- (23) プラトンの対話篇『ティマイオス』では、宇宙論として「魂」「身体」などが論じられており、そのタイトルには一般に「—自然について—」という副題が付けられている。イェーガーの『ティマイオス』の重視は、そのパイデア研究の本質に触れるものと直感されるので、十分に留意しておきたい。訳文の「教育・教養的傾向」は、*paideutic tendency* の暫定訳である。
- (24) アカデーメΙΑ：プラトンによって前387年ころに建てられた学園で、後529年にローマ皇帝ユスティニアヌスによって閉鎖されるまで900年間続いた。なおアカデーメΙΑの実相を研究したものとして、廣川洋一『プラトンの学園 アカデーメΙΑ』（講談社学術文庫、1999年（原本は岩波書店、1980年）、がある。
- (25) イェーガー著の『アリストテレス』については、注記（12）を参照のこと。
- (26) 「軍部局の」は、*in war service* の暫定訳である。
- (27) 訳者ハイエットによる翻訳過程の説明（＜訳文⑦＞＜訳文⑧＞）も含めて考えると、英訳版『PAIDEIA』が原著に準じる性質をもっていることが分かる。ここの、訳者が「飽くことのない関心」をもったという指摘は、英訳版の充実の意味を伝えてくれる。

5. 英訳版の第Ⅲ巻の「序文」（1943年10月）

＜訳文⑤＞

序文

この、『パイデア』第Ⅲ巻は第Ⅱ巻「神的なる本源を求めて」に直接に続くものであ

る。全体の著作の計画とそこに占める二冊の新しい巻の位置についていっそう知りたいと思う読者は、第Ⅱ巻の序文を参照されたい。

第Ⅱ巻は、パイデアイアーという問題からの‘philosophy 哲学’の誕生のことを述べたものである。それは、人間生活におけるこの偉大な新しい力の成長を、その初期の展開の、つまりソークラテースの刺激的な問いかけである‘教育（技術的以上の意味において）はほんとうに可能か?’からプラトーンの『国家』に見るその当然の絶頂までの、古典期を通して辿った。人間の生活と教育の理想の（ideal）目的を形づくるはずの、至高の価値の実在を確認するための、哲学の崇高な苦闘は、‘神的な本源（the Divine Center）’（the divine centre）の探究としてその巻で述べられ、またソフィストの時代の遠心的な傾向、それは人間が万物の尺度であると言明していたのであったが、と対比された。⁽¹⁾

第Ⅲ巻は今や、ペリクレースの帝国が没落した後の、ペロポネネソス戦争の終わりのときに、最高の気運に達したギリシア精神の偉大な再建の努力の全般的な動向を取り上げる。本巻は、前巻と同じ地点から出発するが、しかし知的発展の異なる道筋を追っている。本巻は、その時代の哲学的勢力（philosophical forces）と論理的に対立するものを扱う—すなわち、最高の（first）原理よりもむしろ実際の経験や常識（common sense）を信頼する教養的勢力（cultural forces）のことである。題名が言及しているのは、この教養理念の闘い（conflict of cultural ideals）のことである。⁽²⁾ 第2部では、著書はプラトーンに戻り、哲学者としての彼の生涯の後期を論じている。彼の予言的な最後の著作、つまり『法律』は、自由都市国家の凋落と瓦解という悲劇的な終局への前奏曲であって、それはギリシア的教養の古典期の終結を示す。

私はこの機会に、私の著書の出版準備で妻がしてくれた重要な貢献に対し、深い感謝の念を表したいと思う。彼女は、飽くことのない根気と忍耐力をもって、三巻の元の手稿を解読して、それをタイプライターで打つ形式にするという果てしない難儀を、われわれのその内容についての頻繁な討論は言うに及ばず、自ら引き受けてくれたのだった。私の友人であり同僚であるヘルベルト・ブロッホ博士に、第Ⅱ巻、第Ⅲ巻の表紙の装飾の選択における彼の専門的な援助に対し私の格別の感謝の念を表明できることは、私にとって喜びである。⁽³⁾

ヴェルナー・イエーガー

ハーバード大学
ケンブリッジ、マサチューセッツ州
1943年10月

<注記と考察>

- (1) 第Ⅱ巻の主題として、パイデアイアーの探究の展開として「哲学」が生まれたことが簡潔に記されている。その哲学は、「至高の価値の実在」の証明に向かったのであるが、対される、プロタゴラスに代表されるソフィストたちの思潮の傾向は、「遠心的（centrifugal）」と評されている。
- (2) 英訳第Ⅲ巻は、The Conflict of Cultural Ideals in the Age of Plato（プラトーンの時代における教養理念の闘い）、というタイトルが付されているが、それがイエーガーによる

ものであることが分かる。

ここで扱われている「教養論争」は、現代社会の切実で原理的な、広範な問題群に直結してくる性質をもっており、該当箇所を検討するときに慎重に読んでみたいと思う。なお古代社会の、プラトーン（の「アカデーメイア」）とイソクラテース（の「修辞学校」）との、この「論争」については、廣川洋一が著書『イソクラテースの修辞学校—西欧的教養の源泉—』（講談社学術文庫、2005年、初版は岩波書店より、1984年）において論じており、また『ギリシア人の教育—教養とはなにか—』（岩波新書、1990年）では、プラトーンとイソクラテースとの対比のなかで古代ギリシアの教養理念を検討している。ところで廣川は前著（初版1984年）の「あとがき（原本）」で、次のようなことを、含みのある表現で記している。

ヨーロッパにおけるギリシア・ローマの弁論・修辞術研究の蓄積は、周知のとおり深く厚く、その成果も汗牛充棟ただならぬものがある。わけてもドイツの大古典学者イエーガーの大著『パイデИАーギリシアの教養の理念—』第三卷（ハイエットによる英訳版、1944年）に述べられるイソクラテース論は、私たちの探究の歩みを正しく導いてくれるもののように思われた。しかしヨーロッパにおいてもイソクラテースを専らとりあつかう単行書は、…（以下略）…

- (3) 出版、翻訳における大いなる労苦と情熱が伝わってくる。直接に関連するのではないが、紀元前のプラトーンたちが著作を生むときの、あるいはそれらが翻訳され継承されていくときの、より具体的な営みなども知っていきたいと思う。

6. 英訳版の第Ⅰ巻の「英訳版第2版への序文」（1945年、復活祭）

<訳文⑥>

英訳版第2版への序文

『パイデИА』第Ⅱ巻、第Ⅲ巻の公刊のあと、第Ⅰ巻の新しい版が必要となってきた。本文は小さな訂正のみがなされたが、注記は大幅に膨らんでしまった。それらは、3巻により統一的な外観を与えるために巻末に配置された。新しい注記は、他の2巻と同じように、ドイツ語から翻訳されたのではなく、逆に私はそれを思い切って英語で執筆したのである。私はラドクリフ大学のアイリーン・ウォード女史に負っているが、彼女は私の草稿を読み、私が自分の考えに最終的な表現を与えるのを助けてくれた。私はまた、ハーバード大学のジェームズ・ウォルシュ氏に感謝したいと思うのであり、彼は難解な草稿を写し取り、注記の参照事項を点検し、さらに校正の重荷を私と共にしてくれた。ハーバード大学のセドリック・ホイットマン氏は、私がこの巻の新しい索引を作成するのを助けてくれたのであり、私はこの価値ある援助に対し彼に感謝したいと思うのである。⁽¹⁾

ヴェルナー・イエーガー

ハーバード大学

ケンブリッジ、マサチューセッツ州

1945年、復活祭

<注記と考察>

(1) 英語版における第Ⅰ巻の新版の注記は、英語版として増加されている（ドイツ語版にはない長い注記がある）。その意味で英語版第Ⅰ巻の新版は、とくべつに拡充されたものとなっている。このことから、イエーガー自身が英語版に力を注いだことが推量される。

なおドイツ語版の第Ⅰ巻（第Ⅰ編、第Ⅱ編）の注記は本文ページ下部に配置され、ドイツ語版第Ⅲ編（第Ⅱ巻、第Ⅲ巻）の注記は巻末に配置されている。

英語版第Ⅱ巻（1943年）、第Ⅲ巻（1944年）には索引が付されているので、英語版第Ⅰ巻には、第2版（1945年）でそれが新しく付されたことになる。なお、ドイツ語Ⅰ巻ものの復刻版には索引がない。

7. 英訳版の第Ⅰ巻には、下記のような「訳者の注記」がある（英訳版第Ⅰ巻は1939年）。

<訳文⑦>

訳者の注記

この翻訳は著者によって読まれ承認を得たものである、がしかし、何らかの書き間違いが見落とされているとすれば、ご指摘いただければありがたい。

参照事項は Oxford Classical Texts か、あるいはそれがない場合には Teubner に拠っている。哲学的な断片は the 5th Edition (by W. Kranz, 1934-7) of Diels' *Fragmente der Vorsokratiker* から、また抒情詩や、短長格で書かれた諷刺詩、あるいはエレゲイア体のもの、などの詩歌は Diehl's *Anthologia Lyrica Graeca* (Leipzig, I 1936, II 1925) から引用されている。

古典の著者からの引用文は韻文や散文に翻訳され、またときどき、ギリシア語のドイツ語訳原本の様式と基準に相応するように、圧縮、あるいは簡略化されている。どの原文も複数の解釈可能性のあるくだりは、私はもちろんイエーガー教授によって選ばれたものに従った。⁽¹⁾

GILBERT HIGHET

<注記と考察>

(1) 英語訳第Ⅰ巻は「著者によって読まれ承認を得たものである」と記され、また「複数の解釈可能性のあるくだり」についてはイエーガー教授の判断を受けているとも述べられている。このように英語訳第Ⅰ巻は、著者イエーガーによる立ち入った確認がなされたものになっている。

8. 英訳版の第Ⅱ巻には、下記のような「訳者の注記」がある（英訳版第Ⅱ巻は1943年）。

<訳文⑧>

訳者の注記

この翻訳は、イエーガー教授の草稿からなされたが、それは彼の著作の第Ⅱ巻、第Ⅲ巻はドイツではまだ刊行されていないからである。この翻訳は、著者と詳細に論議してなされた。⁽¹⁾

ギリシア語文献からの引用句はときどき、ドイツ語草稿における引用の基準に相応するように拡充され、また圧縮された。複数の解釈可能性のあるくだりでは、わたしはもちろんイエーガー教授によって選ばれたものに従った。しかしながら、『国家』の φύλακες（ピュラケス 守備隊）を、軍隊的よりも法律的な響きのある ‘guardians’（守護者）よりは ‘guards’（護衛兵）と呼ぶような、慣習による小さな変化については私に責任がある。

参照事項はいつも Oxford Classical Texts に拠る。

GILBERT HIGHET

Columbia University, New York

<注記と考察>

(1) 公刊されたドイツ語版からの翻訳は第Ⅰ巻のみで、第Ⅱ巻（第Ⅲ巻）は、ドイツ語による出版が遅れたという事情があり、その翻訳は「イエーガー教授の草稿からなされた」ということである。また翻訳は「著者と詳細に論議してなされた」と記されており、ハイエットによる英訳版が、英訳でありながら相当に「原典」に近い性質をもっていることが分かる。

Ⅲ. 全体の考察

小論では、イエーガーの諸「序文」を検討対象にし、『パイデシア』の出版経緯と著書の構成の趣旨を理解しようとした。その「序文」の重要性は、小論第Ⅱ章の<訳文>と<注記と考察>で見てきたように格別のものがあるが、その主要な点を以下に簡略に記しておきたい。

1. 出版経緯と反響について

イ) ドイツ語版と英訳版の出版経緯

神澤惣一郎によれば、イエーガーは「パーゼル、キール、ベルリン等の各大学教授を歴任し」、「1936年、48歳のとき、ベルリン大学の教授を辞し、アメリカに渡っている」ということである（イエーガー著、神澤訳『ギリシャ哲学者の神学』早稲田大学出版部、1960年、の「思想家としてのヴェルナー・イエーガー（訳者跋）」より）。『パイデシア』に関しては、野町が「…二巻、三巻は、1936年以降、彼がナチスを嫌い、アメリカに移住したために、それぞれ英文で出版されている」（小論第Ⅰ章第2項参照）と記しているように、その各巻の出版経緯はやや複雑である。ドイツ語版と英訳版の出版経緯は、小論の第Ⅰ章第2項に記した通りである。

ロ) 英訳版とイエーガーとの関係

ハイエットによる訳業と著者イエーガーとの関係についてであるが、「訳者の注記」として、「この翻訳（英語版第Ⅰ巻）は著者によって読まれ承認を得たものである」（＜訳文⑦＞）、「この翻訳（英語版第Ⅱ巻）は、著者と詳細に論議してなされた。」（＜訳文⑧＞）、「複数の解釈可能性のあるくだりでは、わたしはもちろんイエーガー教授によって選ばれたものに従った。」（＜訳文⑦＞＜訳文⑧＞）、と記されているように、著者イエーガーが英訳に深くコミットしていることが分かる。

このことは、ハイエットの訳業に対するイエーガー自身の次のようなことばからも十分にうかがえる。

「私のドイツ語の原稿を相当の困難さのもとで翻訳することを完了され、しかもそれを、翻訳物ではなく、本物の英語の本にされたのである。そのうえ彼は、あらゆる種類の編集上の問題を解決することを手伝うことによってだけでなく、すべての不確かな部分を点検し論議することによって翻訳に貢献された。」（＜訳文④＞）

ハ) 英訳版第Ⅰ巻第2版の拡充について

英訳版第Ⅰ巻のみはドイツ語版から英訳されたが、英訳版の第2版は、その注記が大幅に拡充された。しかもその新しい注記については、イエーガーは、ドイツ語からの翻訳ではなく、「逆に私はそれを思い切って英語で執筆したのである。」と述べている（＜訳文⑥＞）。このように英訳版第Ⅰ巻第2版は、イエーガー自身によって固有に充実が図られた。

ニ) ドイツ語版第Ⅰ巻の反響など

イエーガーはドイツ語版第Ⅰ巻の反響について、「『パイディア』第Ⅰ巻の再販が一年半後に必要とされるに至ったことは、著書が速やかに共鳴者を得たのだという勇気づける徴候である。」と伝えてくれている。そしてその反響の意味について、著作の本質に属することとして「それが引き起こした批判や論議の大部分は、言ってみれば、一つの明確な歴史概念が多数の異なる人間にもたらす、その衝撃によって引き起こされる反響のようなものである。」と述べ、「それはさらに、歴史研究の目的と方法に関する論争の口火となった」とも証言している（以上＜訳文②＞）。

なおイエーガーは、自分の研究の一環とは考えていないがと断りながら、「私の考えは、私の弟子たちによって発表されたプラトーンに関するたくさんの論説、研究論文、学位論文によって広められてきたし、その直接の仲間を超えて多少の影響をもってきた」（＜訳文④＞）と記しており、イエーガーの学説の社会的位置を窺うことができる。

2. 3巻構成の意味について

イ) 3巻の構成の基本的な意味

それぞれの巻の立ち入った意味についてはイエーガー自身の「序文」の叙述に任せることとし（内容は本論そのものということになる）、ここでは3巻の構成の基本的な意味を確認しておく。

第Ⅰ巻（第1編、第2編）は、早期の古代ギリシア（貴族的世界）と古典期のアテナイ（市民的、政治的人格の時代）を対象とし、（文学）作品などを主要な資料として、ホメロス、ヘシオドスからトゥーキュディデースまで、「パイディア」の形成を辿る

（第1編にはスパルターにおける国家と教育も含まれ、第2編はギリシア悲劇、喜劇が中心となる）。

文学が主要な形式であった「パイデアー」の形成の過程から、「（前）4世紀」に「哲学 philosophy」が誕生し、「パイデアー」の探究は哲学者プラトーンにおいて絶頂期を迎える。第Ⅱ巻（第3編）と第Ⅲ巻（第4編）は、この「4世紀」を対象としていて、一対のものとしての性質をもっている。

第Ⅱ巻は、主要にはプラトーンの諸対話篇が検討される。

第Ⅲ巻は、対象の時代は同じであるが、プラトーン（たち）とイソクラテース（たち）との教養論争（哲学の勢力と政治的修辞学の勢力との闘い）が検討される。この巻はⅠ巻の出版以降に構想が変更され拡充されたもののようであるが、その対立する「哲学」と「修辞学」に、「後の時代におけるヒューマニズム（humanism）の二つの主要な形態（forms）が由来している」と述べられている。第Ⅲ巻は、さらに後半でプラトーンの最後の対話篇『法律』が、「ギリシア的教養の古典期の終結を示す」ものとして検討される。

ロ）『パイデア』とその他の論稿・著書

「序文」では、『パイデア』出版に先行する自らの研究過程のこと、出版に平行するように発表されたもの、『パイデア』以降に発表を予定しているものなどが紹介されている（＜訳文①＞＜訳文④＞）。それらの存在も、全3巻の外縁にあってイエーガーのパイデアー研究の理解を支えてくれるであろう。とくに、「ヘレニスティックなギリシア的パイデアー」が「キリスト教のパイデアー」に変容していくという探究の課題については、簡潔に「この著書の第Ⅱ巻と第Ⅲ巻は、古典時代のギリシアの高い教養（civilization）と古代後期のキリスト教の教養（culture）との間の割れ目に橋をかけようとしている。」と述べられている（＜訳文④＞）。

3. 古代ギリシアの「パイデアー」とアリストテレースの位置

「序文」では、すでに触れたように、イエーガーのパイデアー探究法が歴史研究の論争を引き起こすようなものであったことなど（＜訳文②＞）、パイデアー研究の本質的な事項がいくつも語られている。ここでは諸「序文」の内容的な特徴の一つである、イエーガーのパイデアー研究におけるアリストテレースの位置のことに限定し、簡略に確認しておきたい。

イエーガーは、プラトーンについては、「彼はギリシア的教養（paideia）の歴史とされるもの全ての頂点であるに違いない」と述べ、アリストテレースについては、「知る人ぞ知る大家であるアリストテレースと共にパイデアーの概念はその熱烈さの著しい低下を経験する」と評しており、さらにアリストテレースはヘレニズムの初頭に位置づくものとし、「教養（culture）と科学（science）との関連に関わる諸問題は、それはヘレニズムのアレクサンドリアの特質であるが、アリストテレースの学校において初めて明瞭に現れる。」と述べている（＜訳文④＞）。「ギリシア的パイデアー」の形成を問う『パイデア』は、このような意味でプラトーンの叙述で完結するものとなっている。

ところでイエーガーは序文で、「…今日でも、ギリシア的教養の徹底的な、根源的な理解抜きにはいかなる教育の意図や知識をもつことも不可能である。」と自らの確信を述べている（＜訳文①＞）。また「序論」（ドイツ語版第Ⅰ巻）では、「ギリシア人の人間人格

の価値の認識なくして、どうして個人の価値と重要性を要求する権利が正当化され得ようか。」と述べ、「ヨーロッパにおける人格についての歴史は彼らから始まるのに違いない」と指摘している（英訳版に拠る、拙論：2015年3月）。プラトーンで完結するイエーガーの『パイデイア』は、このような現代（社会）への脈絡の洞察を含んで成り立っており、私たちを格別に惹きつけるものとなっている。

Received : October, 6, 2015

Accepted : November, 11, 2015